

同地 殘存家屋内	約二萬五千名
南吉田方面千歳橋變電所	約千名
同 和田製材所	約千五百名
同 共進橋附近	約二百名
同 御三の宮附近	約千三百名
弘明寺町一帯	約千八百五十名
同 觀音境内	約五百名
井土ヶ谷一帯	約四千名
櫻木町東横濱驛構内	約千五百名

第二章 本市第二方面

戸部町自一丁目至七丁目―花咲町自七丁目至十二丁目―櫻木町自四丁目至七丁目―内田町自六丁目
至八丁目―橋町―緑町―入舟町―長住町―高島町自一丁目至八丁目―妻高島町―妻高島町一部―淺間
町―岡野町―南北幸町―輕井澤―平沼町―西平沼町―材木町―仲町―尾張屋町―西戸部町―久保町―
伊勢町―老松町―月岡町―宮崎町―南太田町一部

第一節 一般概況

第二方面は市の西北部を占めてゐる廣い地域である。南方は人家が多くあるので、その方面が激烈であつたことはいふまでもない。此一帯は同様火災を併發して、丘地の一部にも延焼した。其の慘害も他の方面と同じやうに激しかつた。當地の被害状況に就いて述べると、皇太神宮・杉山神社は全焼し、寺院は全焼六箇寺で、火災を免かれたのは四箇寺であつた。戸部警察署第一消防署横濱稅務署專賣局出張所横濱驛前郵便局等は全焼に及んだが、半壞の所も少くは無かつた。傷者は十二名を出したのみで、死者は一人も無かつた。次に工場としては、古川電氣工業株式會社同會社ケーブル工

場東洋麻絲紡績株式會社メートル電球株式會社宮川莫大小株式會社ライジングサン石油株式會社平沼油槽所横濱ゴム製造株式會社帝國蓄音機商會等全焼した主なるものである。横濱船渠株式會社は焼失し、死者二十八名を出だした。久保町の横濱帆布會社は火災を免れたが、死者二十三名を出だした。横濱ゴム會社では二十四名の死者があつた。東京電燈株式會社横濱支店は全焼して、六十八名の死者を出した。市立十全病院と濟生會治療所、外私立病院五箇所は全焼した。横濱驛は四萬からの乗降者のある大停車場であるが、當時は東京發横須賀眞鶴行の列車が著車に間もない時刻だったので、百數十名の乗客と見送人等は下りホームに、其の他階上の待合室や省電のホームにあつた人々も、百名を越えてゐたが、幸ひ建物は新しい堅牢な建物であつたから、倒潰を免かれ、無事避難することが出来た。尚眞鶴發東京行の第十二列車は、驛を距る約三町の地點で震災に遭つたが、脱線も顛覆も免かれ、乗客に死傷者を出さなかつた。

慘狀を極めた場所

各會社各工場は何れも就業中なので、其の被害甚だしく、何れも支柱の少ない建物だから、大震動と共に倒潰し、壓死者を出した。又地勢が悪いため避難することが出来な

かつたので、無残の焼死を遂げたものもあつた。西戸部町御所山俗稱鶴越の險峻な九十九折の坂上に約七十名、中坂に約六十名の焼死體が晒された。裏高島町三十五番地の社會館に残つてゐた止宿人は百二三十名在つたが、建物は鐵筋コンクリートであつたので、皆無事であつた。附近なるライジングサン石油會社では猛火が本館に吹きつけ、遂に第二十九號室、第四號室に延焼したので、館員一同大努力で之を消すことが出来た。中央食品市場は、午前十時より營業を開始し、就業者や購買者等が約二百名群がつてゐたところ、脆くも倒潰して、壓死者四名、下敷より救はれた者十四名あつた。間もなく、同所は焼失した。

主なる避難地

避難地及避難者の概數を舉げると、一日午後零時三十分より午後六時に至るまでに於て、掃部山に一萬人、高島驛に一萬人、池ノ坂埋地に二萬人、縣立第一中學校に三萬人、山王山に一萬人、岡野町濟生會病院庭に一萬人、稻荷臺小學校に二萬人、伊勢山太神宮境内に五千人、掃部山に一萬人、同水道山に三萬人、東海道鐵道線路に五千人、保土ヶ谷町岡野公園に五千人、久保町裏山と山麓とに一萬人であつた。右の中掃部山公園は、最初は適

當の避難場所であつたが、周圍悉く火災に罹つた爲に、一萬の人々は一時危惧を懐いたが、幸に焼死者は出さなかつた。高島驛は平地で、而かも廣漠なる土地である爲め、避難には最も好適地であつた。池ノ坂埋地は周圍三面小丘を以て圍繞された低地で、約二千坪の廣場があつたので、適當な避難地であつた。西戸部町なる縣立第一中學校は、丘陵に建てられてゐる校舎が火災を免がれ、地震に因る倒潰もなく、且つ廣い土地なので、好い避難地であつた。山王山は高丘で、面積廣く適地であつたことは、避難民に取つては幸ひであつた。而し掃部山は、燃え盛る火災が次第に襲つて來たので、避難民は大に困つて、伊勢山を下つて、渡邊邸へと移動したが、同邸も火災に罹つたので、三度避難した。水道山は位置が高臺で貯水池もあり、且つ面積は廣大で、人家は稠密せず、頗る好適の地であつた。東海道鐵道線路は相當の面積を有し、一時の避難地としては好適地であつたけれど、小屋掛等は出來ないので、避難民は他へ夫々移轉した。保土ヶ谷町及岡野公園は、廣漠なる丘陵地を形成して、何等火災等の憂なく、最適當の地であつた。久保町裏山と山麓は、面積も廣く、火災にも何等の關係なく、頗る好適地であつた。其後此等避難者は、通信及交通の機關を失つて、極度の不安と恐怖とに怯えた。

第二節 各町誌

一 戸部町 一―七丁目

戸部町一丁目 戸數は災前八十戸を算したが、全町に亘つて其約半數を倒潰した。公共建物として、壓焼死者は、三十名を出した。中にも十二番地の印刷所と、十七番地の下宿屋とは、一家全滅の悲運に遭つた。若尾邸の石垣、渡邊邸の石垣等が壞れたため、通行人の中に死亡者も多數あつた。この附近の避難状況を見ると、町民は主に伊勢山に逃げたが、午後四時頃には、周圍猛火が吹き付け、忽ち神殿に燃移り、多數の避難者は、一時全滅と覺悟したけれども、漸くにしてそれを免かれたのであつた。

戸部町二丁目 二丁目も一丁目に準じて震災火災共に激甚を極め、戸部坂の兩側にある町は、勾配急であるためか、約九分通りは將藁倒れに倒潰し、忽ちに火と化してしまつた。百四十戸世帯の中に、四十名の死者があつた。中にも哀れなのは、四十八番地の理髮店關親子五人が全滅したことであつた。住民の多くは、掃部山伊勢山に、一分は水道貯水池又は山王山方面に避難し、八日頃より焼跡に舞戻り、復興に努めた。

戸部町三丁目 三丁目の表通り約半数は倒潰し、裏通は比較的倒潰しなかつたが、間もなく四丁目の火勢は、學校前と二丁目とに延焼し、忽ち二方火に取り圍まれ、加ふるに旋風が起つたので、全町は忽ち火と化した。町民は大急ぎで、伊勢山・掃部山・久保山方面に避難した。災前人口三百五十八人あつた中、三十一名の壓焼者を出した。中にも六十五番地の高山吉之助方は一家三名全滅の悲運に遭つた。

戸部町四丁目 四丁目は戸數約四百戸、人口千六百五十人を算してゐたが、殆ど全部倒潰して、五十四名の壓死竝に焼死者を出した。震後町内の煎餅屋より發火して、一帯の火と成つたので、住民の多くは掃部山に避難し、逃げ後れた一部の者は、辛くも池の坂方面へ逃れた。永樂銀行支店は支店長始め店員數名壓死した。百一番地疊屋萩原辰五郎氏は、妻子と共に焼死した。十月後になつて、ぼつ／＼假住居を建て、復舊に専心した。

戸部町五丁目 五丁目は戸數二百六、人口八百五十を算したが、約七分は倒潰して、死者廿四名を出した。百五十八番地山崎昌平氏は一家四名全滅した。稅務署の鐵筋コンクリート建も正面の柱が倒れて、二三名の死者を出だし、間もなく四丁目からの火災が飛火して、午後一時頃一帯に火と化した。町民は横濱驛前高島驛構内又は掃部山等に避難した。

戸部町六―七丁目 戸數三百三十、人口千六百を算したが、他町に比較して死者少なく、十二三名に過ぎなかつた。住民は横濱驛と高島驛構内とに避難し、一部の者は中學校方面に逃れた。

二 花 咲 町 七―十二丁目

花咲町七丁目乃至十二丁目は、南は紅葉橋を起點として、東側櫻川に沿ふた片側町で、十二丁目は横濱驛前である。災前の戸數は三百六十九、人口約千五百であつた。大建物は横濱市瓦斯局地方專賣局横濱出張所横濱劇場等がある。町民は野毛不動下に一時避難したが、猛火の追撃を受けて、更に伊勢山に轉じた。六七丁目の住民は紅葉坂より伊勢山へ、八・九丁目の住民は多數掃部山へ、十丁目十二丁目の住民は、主として横濱驛及び高島驛方面へ避難したのであつた。

三 櫻 木 町 四―七丁目

第一方面を見よ。

四 内田町 橋町 緑町

内田・橋緑の三町は、横濱驛より櫻木町驛に至る高架線と、横濱船渠株式会社及び高島驛構内との中間に在る小さな町である。内田町六丁目の住民は、緑町一丁目の發火により、高島驛構内に避難した。當時同地は海嘯の襲來を喧傳された爲、他に避難場所を轉じた者もあつた。

五 高島町一―十丁目 裏高島町(横濱驛を含む)

高島町三丁目からは廣い工場地帯で、多くの大工場會社等の大建物が、並び建つてゐたが、四邊新しい埋立地だったので、大建物を初め全町家屋は、一齊に倒潰した。川岸は龜裂と埋没とで慘狀を極めた。郵船會社附近から火の手を發し、見る／＼中に四方に延焼した。この時火は早くも、ライジングサン石油會社の二つの石油タンクに入つた。俄然轟然たる爆音が四邊を震動せしめた。黒烟は濛々と揚り、火の柱は天に沖され、その物凄さはなんとも名狀出来なかつた。やがて火になつた石油は、思ふまゝに流れ出し、總ての物を焼きつくさうとかゝつた。毒烟は地上を覆ふたので、無殘にもそここゝ

に窒息して死ぬものがあつた。やがて火になつた石油は、櫻川の鐵橋を溶かして、川中に流れ込み、水面は火と化した。その時家財を小船に積んで逃げやうとしてゐた町民があつたが、船諸共焼死した。此邊の安全地帯としては、神奈川の高臺や、高島驛などで、此方面に馳せ寄する者が無數であつた。海岸方面に避難した者も、尠からずあつたが、海嘯襲來の豫報を耳にしたので、進退玆に谷やまつたが、幸に海嘯はなく、吹捲く毒烟に咽びながら、鎮火を待ち得たのであつた。

六 淺間町

淺間町は、戸數約一千三百、人口五千二百、南淺間町は戸數七百、人口三千五百であつた。同町は舊東海道筋の一部と、保土ヶ谷町とに接近した方面を埋立て、住宅區とした所で、東方輕井澤に通ずる分岐點から西南は新田間川を隔て、岡野町に面し、北は、隱谷戸、打越、大窪、追分、淺間下、神明下、霜之下、鹿島社、宮司、大新田等の平地である。即ち新田間川と帷子川の一部を境とした東北方の區域であつて、社宮司、大新田、鹿島附近は南淺間町と呼んでゐる。倒潰した戸數は約四分の一位で、他は殆ど半潰に近い程度であつたが、霜之下にある俗に魚油長屋と呼ぶ九十二三戸、芹澤眞麻田工場、山内眞田工場、淺間下

にある俗稱三州長屋の六十三戸、洪福寺隣徳小學校等は一堪まりもなく倒潰して、木村隣徳小學校長は壓死した。區内に三十餘名の壓死者を出だし、尙、外出先にての壓死者が約七十名あつた。神明下では背後に直立する崖が崩壊して、倉庫一棟と物置一棟とが埋没し、二名を生埋めにした。南淺間町の五百二十九番地は材木溜池の在つた所を埋立てた地で、地盤軟弱の爲め、地裂を生じ、濁水噴出した所が多かつた。折柄久保町東洋麻絲紡績株式會社が火を發し、帷子川に添ふた淺間町の一部に延焼したが、僅かに十六戸を焼いたのみで、他に同地區内からは火災を起さなかつた。此の混雜中、各方面よりの避難民が一時に押寄せて雜鬧した。

七 岡野町 南幸町

岡野町、南幸町方面は、災前約二千戸、人口一萬を算したるた。同町は昔岡野新田と稱した埋立地であつた爲め、第一震と同時に全町殆んど全潰の有様で、女子師範學校及附屬小學校、縣立高等女學校、岡野小學校、横濱魚油株式會社、上原倉庫、關東絹業株式會社、横濱染工株式會社等の大建物も倒潰或は半潰した。又各所に地裂を生じ、濁水噴出して、膝を沒し、他町に劣らず災害の度も大きく、壓死者約七十名を出した。折柄午後一時頃、

町内數箇所、火災を起して、火は八方に擴がつたので、住民は淺間橋、新田間橋を渡つて、淺間町方面に、或は軍用線路を辿つて、保土ヶ谷方面に避難した。平沼町の護謨製造株式會社の大煙突は打倒れて、船の通行を絶つた。後刻避難したものは、鐵道線路傳ひに保土ヶ谷方面に通れた。高等女學校附近より西方は火災を免がれた所もあつたが、女子師範附屬小學校から再び發火し、同校は全焼したが、倒潰した女子師範學校及高等女學校と其他民家約三百戸は罹災を免がれた。

八 平沼町 材木町 仲町 尾張屋町

同町一帯は帷子川と石崎川との中間區域で、高島町戸部町及西戸部町に接して居る。戸數千二百八十、人口五千五百五十あつたが、此中焼失戸數千三百三十戸に及び、殘存した家屋は水天宮及其の周圍に八十戸、尾張屋町に三十戸と百四十八番地の一部とで、約百五十戸に過ぎなかつた。殊に此地區は埋地の關係で、震災其のものも大きく、壓死者百三十名を出した。尙此の地區は、工場地帯で、横濱市瓦斯製造所、タンク、友田製藥場、古川電氣工業株式會社、横濱護謨製造株式會社、農工銀行、横濱工業會社、帝國蓄音機商會、出張所、金輪社、横濱紡績株式會社、横濱電氣工業株式會社、大野ガラス工場、京濱王冠コルク

工業會社、東洋船底塗料製造合資會社、日ノ出金屬株式會社、明治食料株式會社、東洋鑛詰合資會社等の大建築物、外に久成寺、由村座等があつたが、此等の中、日ノ出金屬、明治食料、東洋鑛詰を除くの外は、全部倒潰且つ燒失の厄に遭つたのみならず、多數の壓死者をも出だした。町内の鎮守水天宮の例祭は九月五日のことゝて、町の若者は其の準備に忙殺され、數年來好景氣であつたので、當年こそは大々的の祭典を催ふさうと意氣込んで居つた。然るに折柄の大地震に、町内は忽ち修羅の巷と化したのであつた。道路に至る所に地裂を生じ、中にも西平沼町六十二番地附近は最も甚しく、此の地裂より濁水が盛んに續出して、忽ち膝を没する迄に至つた。住民は餘りの事に何れも呆然として爲すことを知らなかつた。折柄、東方は平沼町一二丁目の境なる友田製藥工場附近より、西方は電線工場方面より、及鹽田方面より火災を起し、忽ち擴まつて、友田製藥工場方面の火は、平沼町通より仲町、材木町及裏高島町二丁目、東京電燈會社橫濱支店に移り、同事務所及古河電氣工業會社電線工場橫濱ゴム製造會社及高島町三丁目より八丁目、南幸町まで燒き拂ひ、尙ほ神奈川方面に延燒した。西方よりの火は古河電氣工業會社ケーブル工場コーラル釜より發火して、附近一帯を舐め、休業中の製油工場、橫濱工業會社に延燒し、尙ほ平沼町の火と合して、高島町方面を舐め盡さん有様となつた。戶外に逃

れ出た住民は、家財を取出すもあり、老幼を扶けて避難するもあり、血に染む負傷者を安全地に移さんとするもあつた。其の混亂中に、瓦斯タンクが爆發するから早く逃げよと言ひ歩く者もあつた。瓦斯タンクからは黒煙が濛々として吹出して、強風に煽られてゐる。是れは瓦斯製造所で爆發を恐れて、瓦斯を放出するためであつたが、爆發の前兆だと早合點し、附近の住民は悲鳴を擧げて逃げ惑ひ、或は鐵道線路に、或は東海道線路に雪崩を打つて押寄せた。路上一面の濁水に地割の箇所がわからないので、地割内に落込んで、濡れ鼠になつて逃げるものもあつた。

西平沼町素封家平沼邸の如きは、家屋倒潰して、六名が下敷にされてゐたが、容易に援け出すことが出来なかつた。ところへ高野某が宙を駈けて、火がつかうとしてゐる屋根の上に飛び上つて、中を掻き開け、漸くのこと令嬢と女中とを救つたが、後の四名は既に壓死してゐたので、どうすることも出来なかつた。平沼町三丁目の橫濱護謨製造會社も、鐵筋コンクリートの工場倒潰の際には、二十四名の壓死者を出だした。斯くて火は益擴大して、全町を襲ふたので、住民は先を争つて、軍用線路或は東海道線路に遁れたが、海嘯が来るなど、宣傳する者があつたのと、折柄持出した家財が四圍の火焔に焦げて燃上つたので、已むなく線路傳ひに保土ヶ谷方面の風上へへと逃げ、或は淺間町方

面の山に遁れ去つた。此方面は帷子川右崎川の中間で、他町に通ずる橋梁は、悉く破壊されたので、避難民を困らした。前記の外にも、平沼町高崎三次郎氏方では六名の焼死者を出だした。

九 西戸部町

西戸部町各字地區に於ける倒潰家屋は、全戸數の約二分の一、他は全部半潰の程度と見做されてゐる。先づ鹽田古井戸方面に當つて、黒煙が立昇つた。町民等は中學校か久保山方面かが安全の場所だと教へられて、宇石崎御所方面の住民は、稅務署前から保土ヶ谷へ行く道、俗稱菊花園通や、是れに平行してゐる通路から願成寺方面へ、又電車線路附近の住民は手近な鐵道線路へ、扇田鹽田以西の者は平戸橋通、其の他の路線を辿つて久保山願成寺方面へと逃げ行くのであつた。古井戸方面から起つた火は、忽ち猛烈となり、鹽田を襲ふたが、同所は小さな家ばかりなので、火は縦横に狂つて、更に扇田方面に延焼した。東は綠橋、戸部二三丁目、南は伊勢町池ノ坂附近から發火して、西戸部町的地帯と御所山一帯が、包圍されたので、住民は安全地帯と思はれる藤棚方面若くは第一中學校方面に避難した。けれど此方面は御所山の斷崖に遮ぎられて登る道なく、菊花

園通から縣廳官舎方面に行くより外に安全通路なく、又御所山丘上の西南鞍止坂上から、池ノ坂方面へ向ふより他に、安全の通路はなかつたのである。最初發火地點と隔だつた住民は、或は此の邊を安全地となし、近きものは鹽田の傍なる杉山神社境内と、西戸部小學校の運動場へと向つた。一方池ノ坂方面から起つた火炎は、西に延焼し、鞍止坂に迫つて來た。石崎御所方面の住民中、逃げ後れた者は、忽ち猛火に遮られ、久保山へも、中學校方面へも行くことが出来なかつたといふ絶望に陥りながらも、前後左右から火に攻められつゝ、已むなく御所山に向つたが、俚俗鶉越の險坂に遮ぎられて、此處に無慘にも、約百三十名が焼死したのであつた。(前節参照)

一方東海道線路に避難した者は、北に方る平沼方面の火災と、西平沼町の瓦斯タンクの爆發とを憂ひ、線路傳ひに横濱驛方面或は藤棚方面、或は第一中學校方面へと、屢々避難場所を換へた。杉山神社境内や西戸部小學校運動場に入つた數千人の避難民は、更に愴惶として第一中學校方面に避難したが、是れ亦鞍止坂縣廳官舎方面が盛に燃え上つて、西へ延び、中學校方面の通路を遮斷する形勢となつたので、更に鞍止坂の下に集まり、鹽田方面よりの避難民と坂下に合して、漸く危地を脱がれたが、中學校方面の安全地に著いた時には、亦々猛火は鞍止坂より願成寺に迫つて來た。一方横濱驛前は避難民群

つてゐたが、やがて横濱驛も燃えだしたので、避難民等は高島驛へ逃れた。

(イ) 西戸部町字扇田

同町は災前戸數五百九十二、人口二千三百六十八名であつた。家屋は大部倒潰した。間もなく久保町方面より火災起り、扇田方面に延焼した。町民は附近の杉山神社境内、戸部小學校運動場、中學校運動場、久保山方面等に避難し、線路に近い住民は鐵道線路へ避難したが、間もなくこの方面も火の海となつてしまつた。町内にての死者は二十七八名を算する。

(ロ) 西戸部町字御所山下附近及山上

西戸部町字御所山下附近及山上は、災前戸數四百六十三、人口約三千であつた。鹽田方面と戸部四丁目との火は、相合して忽にして襲ひ來た。死者は約二十名を出したが、一家全滅の家族はなかつた。唯當時同町方面に於ける慘鼻の中心となつた鴨越には、多くの死體を残したが、是等死者の多くは他町よりの避難民であつた。此附近に於て奇しくも生命を取止めた者は、坂下の海老塚氏庭内なる小池の約三十名であつた。住

民の避難地は、主に中學校方面その他高島驛構内であつた。

(ハ) 西戸部町字羽澤方面

同町邊は倒潰家屋少なく、多少石垣が崩壊したに止まつた。死者は稍多かつたが、概して町外に於てであるらしい。火は伊勢町方面と戸部町一丁目方面とより羽澤に迫り、入口丁字路の前面にある數戸を焼いた。同所一帯は、市立十全醫院の大建物に接してゐるので、防火を怠らなかつた結果、火は段々延焼したけれども、谷戸一帯の焼失を免かれ、全戸數約九百戸の内約百五十戸の焼失に止まつた。町民は主に茂木別邸と野澤山及水道山に避難した。

(ニ) 西戸部町字山王山

池ノ坂の上部即ち山王山は、久保山道に於て丁字形をなし、南側には税關官舎あり、前面は約一間半位の崖地となつてゐる。約二十棟、七十戸は地震の爲に恰も貝殻を伏せた如くに倒潰した。間もなく清水湯の裏手より火災を起した。一方メソヂスト教會二號官舎を焼いた。附近住民は協力して防火に努めたが、効なきを見て之を見捨て、更に

前面の三號官舎其他に延焼して來たのを極力防いで、幸ひに効を奏した。又四號官舎其他の窪地にあつた官舎は皆助つた。税關長官舎裏手に在る愛隣女學校は焼失したが、他に延焼せず、大事にならなかつた。住民の多くは一號官舎前及そこ隣合つた丘、一本松方面に避難した。壓死者は四名であつた。

(ホ) 西戸部町字一本松境ノ谷富士塚

一本松境ノ谷及富士塚方面一帯は高地で、百數戸の倒潰に止まり、火災を伴はず、附近町民の避難地として、最後まで安全を保ち得た。一本松小學校も倒潰を免がれた。火災を免がれた原因は、附近に森林を控え、更に南方に水道貯水池の高臺もあつたので、自然に火除けとなつたからであつた。住民の多くは境ノ谷の松山に避難した。松山には各方面から押寄せる避難者で一杯になつた。災後、此地を大掃除をした時、避難民の食用した罐詰の空罐が無數あつた。それを人夫二十七人が五日間で取片づけたといふことだ。

(ヘ) 西戸部町字伊勢町及山王山の一部

この方面は災前戸數約四百戸、人口は千六百人であつた。家屋は多くは倒潰し、壓死

者は約二十名を出だした。道路の龜裂は伊勢町四丁目八十八番地附近、九十一番地附近等五六箇所もあつた。火災は戸部三丁目池ノ坂方面の二箇所から發した。町民の避難方向は、初め背後の一本松高地をさしたが、そこは崩壊してゐて果されず、已むなく伊勢山其他へ避難したのである。

(ト) 西戸部町字掃部山及伊勢町の一部

伊勢山北の掃部山は、樹を植えて、横濱市の小公園とされ、港を眼下に見渡す事が出来る景勝地であつた。北東に向つて港を見てゐる井伊掃部頭の銅像が、大震災と同時に半ば東に方向を轉じたことは、災後話の種となつてゐる。掃部山の南方は伊勢町の一部で、神奈川縣廳の官舎となつてゐる。火災は戸部町方面から襲つて來て、隣接せる大谷嘉兵衛氏の邸は瞬く間に類焼し、更に伊勢町の縣知事官邸に延焼した。一方紅葉坂西部の火は、其邊りに竝び立つ大邸宅を舐め盡し、更に北方花咲町八丁目より南方六丁目に延びた。斯くて四圍は一帯の火となつた。當時附近の避難民は山上に群つたが、四方から襲つて來る猛火に堪え切れず、あわてゝ逃れ去つたのである。

伊勢山 伊勢町官舎は戸部四丁目の火を受けて焼失した。此の火は花咲町の火と

合し、益熾烈となつた。人々は神の加護があるから大丈夫だと、伊勢山太神宮の境内へ續々と押し寄せた。ところが、戸部町一丁目宮崎町野毛町花咲町伊勢町官舎等の猛火は、野毛の切通を残す外、三面より此伊勢山を包圍したので、幾千の人は悲鳴を擧げて逃げ廻はり、更に避難地を變へなければならぬこととなつた。一方火の襲はぬ野毛切通しは、崩壊して一路を塞ぎ、加ふるに襲ひ來る野毛戸部方面の火は、切通に迫つて、交通は益、不可能に陥つた。前に在る崖上の建物は、其時未だ火災に遭はなかつたけれども、崖が崩壊して登る道を塞いでゐて、人々は唯焼死を待つのみであつた。斯かる絶體絶命の場合、不思議にも伊勢山山上から切通までの間に數條の電線が垂下された。是れこそ命の綱と、雪崩るゝ人々は順次に一筋の針金に命を托して、向側の崖に向つた。幸ひにも亦數條の電線は、垂下つてゐた。群集は這ひ上つては落ち、いくども繰り返して、漸く野毛山の山上に攀ぢ登つたが、老人や小供を連れた者達は、どうすることも出来なかつた。後日の話に依ると、電線は約三千人の命の綱であつたとのことである。一方山上に残された人々は、午後四時頃に至つて、一層四邊の火勢が加はり、本殿も焼け始めたので、焼かれるやと思ひ、苦しめられながら、あちこちへ逃げ惑ふてゐた。而し原田氏の別邸が延焼しなかつたお蔭で、大多數は救はれた。

(チ) 西戸部町字石崎西部

石崎町の西部は、災前戸數千七百五、人口七千三百三十一であつた。震害は電車通に最も激しく、倒潰した家屋は多數に上つた。火は鹽田横枕方面と、四百六十六番地、百八十八番地附近より發した。町民は一目散に久保山第一中學校方面に向ひ、一方東海道線路に、或者は川中に入つて、火の終熄するを待つたのである。斯くて全町焼失して死者七十名を出だした。

(リ) 西戸部町字石崎東部

石崎の東部は、災前戸數五百五十四、人口二千四百三十七を算した。此邊りは甚しい震害はなかつたが、大半焼失した。住民は多く横濱驛構内に避難したが、中には鴨越に行つて慘死したものもあつた。一家全滅は二百三十三番地佐野軍次郎方で四人、二百六十八番地貫井八百八氏方四名などで、合計約二十名あつた。

(ヌ) 西戸部町字古井戸

古井戸は災前の戸數八百三十、人口二千六百を算した。家屋は二十餘戸倒潰し、續いて久保町と古井戸との境より發火して、横濱驛方面に延焼したが、風が變ると再び火元の方に逆戻りをして、藤棚停留場附近を襲ひ、久保町方面に火勢を加へて燃え始めた。此時戸部警察署長遠藤警視は署員を派遣し、附近の町民と協力して、必死となりて防火に努めたので、久保町方面よりの火は喰止めた。この功に依つて同方面久保町遠くは南太田町等が、火災を免かれたことは、町民の何より幸ひあつた。町民の避難地は久保山の高臺一帯であつた。焼失戸數約百戸に止まり、死者數名を算したのみで、他町に比し、被害は輕少であつた。

(ル) 西戸部町字西ノ前 池ノ坂 西ノ原 横枕 鹽田

宮ノ前池ノ坂西ノ原横枕鹽田の各地域を合して、災前の戸數約二千六百、人口九千を算してゐた。火災のために、約三百戸を殘して、全町は灰燼に歸した。西前小學校、西戸部小學校、西戸部病院、杉山神社等も焼失した。最初は横濱驛方面に向つて燃焼したが、避難民は第一中學校あるひは久保山電車道、戸部小學校、杉山神社境内へと逃れた。然るに最初に安全と目された西戸部小學校庭及び願成寺も、忽ち危機に頻したので、附近

の住民は協力して、池ノ坂九百三十四番地石原氏宅を防火線と定め、必死の活動を爲して、漸くにして火を喰止めた。それが爲め第一中學校は延焼を免かれたので、後日避難民の收容所とされた。池ノ坂にゐた避難者二三千名も、之が爲に無事に助かつたのである。住民の壓焼死者十數名を算したが、此の外出中の者で約百名もあつた。

(ヲ) 西戸部町字宮ノ前

宮ノ前は、杉山神社の手前の左側の町である。昔刑場のあつた鞍止坂に接してゐるが、今は昔の姿を變へて、縣廳官舎の一廓をなしてゐた。一帯の家屋は倒潰して、死者十二三名を出だし、續いて扇田御所山方面より襲ひ來た猛火は、官舎を初め一帯を燒盡したのであつた。

一〇 久保町

災前戸數一千三百、人口四千六百を算した。震災では倒壊半壊相半し、四百四十番地に至る道路約百二三十間に亘る間に、幅三尺位の大龜裂を生じたが、幸にして焼失家屋は僅か數戸で、住民の壓死者は三十七名であつた。町は最近の新開地で、諸工場を除い

ては、人家も少なく、住民の多くは、自宅の裏庭などで一夜を明かした位で、被害は比較的軽かつた。他方面より避難者が續々と集合して、約三萬人に達した。地内の主なる建物は、東洋麻絲紡績株式會社、東洋電機株式會社、横濱帆布株式會社、變電所、川合寺、林光寺、横濱市火葬場、同齋場、圓福寺、安樂寺、杉山神社、諸星インキ製造所等で、圓福寺、安樂寺、杉山神社を除く外は、何れも倒潰し、東洋麻絲紡績會社は倒潰して火災を起し、四十五名の壓死者を出だした。横濱帆布株式會社の煉瓦造りの工場も倒潰の際二十七名の壓死者を出だした。震後變電所附近より發火し、水道路に向ひ延焼して、此久保町も危険に陥つたが、住民は必死と防火に努めた結果、水道路方面一帯に焼失を免かれた。別に東洋麻絲紡績會社より起つた火先は、前面なる水道路局の材料置場に延焼して、西戸部町、鹽田方面に向つて燃擴がり、尙ほ火の粉は帷子川を隔てた對岸の淺間町にも延焼した。本地区内で焼失した戸數は、僅に數戸であつたのは、發火場所が民家と幾分隔つた關係であつた。尤も其の他に數箇所からも發火したが、町民及び避難民協力して消止め、大事に至らしめなかつたのである。本町に屬する久保山には市の共同墓地があつて、幾千の墓碑が倒れた。林光寺は本堂庫裡とも一堪まりもなく倒潰し、火葬場も打倒れた。それが爲め暫く露天火葬を行ふの已むなきに至つた。川合寺も同じく全潰の厄に遭

つた。同寺には又と得られぬ日蓮像があつた。それは、後醍醐天皇の皇子大覺大僧正の刻まれた一本三體の日蓮の像で、備前國赤磐郡葛城の香雲寺と、同國御津郡伊島村の妙善寺と、此の川合寺とにあるだけの有名な寶物であるが、是れも破壊されたが、今日は漸く修繕された。震災前川合寺から約三町東に新墓地が設けられてあつたが、此處に震災で死んだ無縁者五千七百七十八名の遺骨を合葬して、一大記念碑を建設し、其の傍らに新に法華道場を建て、讀經の聲が常に絶えないのを見ては、徐に當時を追憶して、其の凄慘の狀を思ひ出させる。町内は焼失した民家が少なかつたので、他方面よりの避難者は、各戸共に充滿した。災後流言浮説が喧傳されたので、此邊りの不安状態は亦格別であつた。

一一 老松町 月岡町

此の方面で平沼邸は唯一戸孤立して延焼を免がれたのである。同邸は戸部一丁目から野毛切通を下つて、老松小學校角を西に、十全醫院に登る南側の坂の途中にあつて、野毛町四丁目の一部と老松町南側の全部は、大部分同邸で占めてゐる。野毛町方面で火燭に追はれた者達は、同邸が安全な避難場所と信じて、數百名逃げて來た。而し野毛

切通方面や、野毛本通方面の火は、老松町坂下で一團となつて、老松小學校を焼き、一面月岡町方面にも延焼した。これが爲め同邸は盛に火の粉を溶びたけれども、庭園廣く且つ道路面から高さ一丈餘に及ぶ丘上であるので、それ程危険を感じなかつたが、前面の老松町が火になるに及んで、高層な建物からの火の粉は、雨の如くに飛散して、邸内の樹木や建物に延焼し、屢、大事に至らんとした。更に老松町の火災は、次第に西方に延び、道路に接する家屋と其後方に在る大建築物の近藤病院とを舐め盡して、將に十全醫院に延焼しやうとした。羽澤入口の防火は効を奏せずして、舊野毛坂に延焼し、見る／＼此邊りの陋屋を舐め盡して、舊野毛坂百四五十番地を烏有に歸した。時は已に日没で、炎々たる猛火は高く天に沖し、折柄吹き募る風は焰を煽り立てた。斯くて火焰は道路を隔つる十全醫院に延焼せんとした。同院にては之れが延焼を防がんと極力努力したが、一方反對側の田中邸に類焼し、同邸に連なる民家は忽ち猛火の襲ふ所となつた。是に於て十全醫院は後方と側面の猛火に迫られ、遂に類焼の厄に罹り、さしもの大建物は燃焼一時間餘で焼失した。

一一一 宮崎町

宮崎町は高臺であるから、火がこの方面に延焼し來たのは、午後になつてからであつた。同町には伊勢山太神宮の廣い境内があつて、且つ樹木繁茂してゐるので、火は大丈夫と避難民續々押しかけた。而しやがて午後三時頃になつて、野毛坂方面から襲ふ猛火は驚くべき威力を以て、宮崎町に延焼したのである。幾千の避難民は狼狽して、神宮の境内へと逃げたが、遂に猛火は境内にまで延焼し、社務所本殿まで焼き盡した。而し原田邸が防火に努めた爲め、焼けなかつたので、避難民は命拾ひをして、死者は僅かに社務所裏の八名と鳥居側の二名だけであつた。